つちうら発

未来への伝承 ⑭

平安時代のノコギリ

普段はあまり気にも留めませんが、私たちの生活はさまざまな道具に囲まれています。大昔であっても、人は道具を駆使して生活してきました。道具を使うことは、人類の証ともいえます。今回は、そんな道具のうち、市内上高津新町の寄居遺跡で出土したノコギリを紹介します。

鉄製ノコギリ（寄居遺跡（上高津新町）出土　９世紀　当館蔵）

ノコギリの歯部分の拡大写真。歯の間には細い溝があり、歯は少し丸みを帯びているように見えます。

寄居遺跡は、上高津貝塚の東南東約１kmの台地上にある遺跡です。隣接するうぐいす平遺跡とともに、平成４年に発掘調査が行なわれました。寄居遺跡では、主に古墳時代と奈良・平安時代にかけての住居跡が多く見つかりました。奈良時代は後半から竪穴住居が作られるようになり、平安時代前期（９世紀）まで集落は続きます。ノコギリは、そのうち９世紀中頃の住居の跡から見つかりました。実に１１００年以上も昔のノコギリの発見です。

鉄で出来ていますので、発掘調査で見つかったときはかなり錆びていました。現在は保存処理を施したことで、全体の形状がかなりよくわかるようになっています。歯の部分があることから、一目でノコギリであるとわかります。全体の長さは約30㎝で、これまで見つかったものと比較しても、小型のノコギリとみられます。歯のある部分は約20㎝ほどで、それに柄の部分にあたる茎がつきます。その表面を観察すると、木材片がわずかですが残っていることがわかります。もともとは、茎を差し込む木製の柄が付けられていたようです。現在では錆びて埋まってしまいましたが、茎には木製の柄を取り付けるのに用いる目釘穴が空けられていることがＸ線撮影でわかりました。歯の部分は直線ではなく、先端に行くにしたがってやや内湾する独特の形状です。よく見ると、先端部分の歯もややや細かく作られています。

現在見つかっている古代のノコギリで、最も古いものは古墳時代前期にまでさかのぼります。平安時代までのノコギリは数が少ないのですが、その形状はバラエティに富んでいます。幅の広いものや狭いもの、歯も両側にあるものと片側だけのもの、手で握る柄が片側だけのものと両端にあるものと、大きさもまちまちです。ノコギリといえば木材を切るものとばかりイメージしてしまいがちですが、骨のような硬質のものを切ったり、金属を切ったりとその用途も多様であったことが指摘されています。

市内で見つかったノコギリは、やや細身で小さなものです。具体的に何に使ったものなのかはっきりとはわかりませんが、今とさして形の変わらないノコギリが、１１００年以上も昔の暮らしのなかで用いられていたことにまず驚かされます。そして、この道具が長い時間のなかで大きく変ぼうを遂げることもなく、現代まで使われ続けていることもまた注目すべきことのように思います。

今回紹介した資料は、現在上高津貝塚ふるさと歴史の広場　考古資料館で開催中の企画展「土浦の遺跡11　上高津貝塚の歴史的環境」（５月13日㈰まで）で展示しています。ぜひご覧ください。

問 上高津貝塚ふるさと歴史の広場（☎８２６・７１１１）

発行　土浦市　〒300-8686　土浦市下高津一丁目20番35号　☎029-826-1111
http://www.city.tsuchiura.ibaraki.jp/　E-mail:info@city.tsuchiura.ibaraki.jp
編集　市長公室広報広聴課　再生紙を使用しています　PRINTED WITH SOY INK 環境に優しい大豆インキを使用しています
次回「広報つちうら」５月中旬号は、５月15日(火)発行予定です